

## 《論 文》

## 初心に還って

## —— ジンメル再読 ——

鈴木 幸 壽

私たちが「社会学」を学び研究しようとしたそもそもの動機なり目的なりはおそらく人様々であるに違いない。そして社会学という学問にお目にかかったとき、そこから受けた印象もまた多様であったに違いないと思う。しかし、いやしくも社会学という歴然たる学問との初めての出会いで得た共通認識は、いわば「社会」というとてつもない怪物をいかにして理解できるようになるかに帰するといえよう。社会を知り、さらによりよい社会を作り上げるために社会学を学ぼうとする限り、当然のことながら、西欧で芽生えたこの社会学という学問体系がいかなる人々によって、どのように構築されてきたかを出来るだけ知っておかなければならない。ということは、逆に言えば、日本の明治期に導入された社会学が、どのような道筋を辿って現在に至っているかを篤と知っておくことが極めて肝要である。

社会学を自己の専門として選択した以上この学問への入門を有効ならしめる手段は、以上のことから察知できるように、先ずは先人の業績を知る手だてとして「入門書」を読破する必要がある。私が「初心に還って」というテーマを設定した所以は、他でもない。社会学という未知の世界に踏み込むためのファースト・ステップが『入門』による知の蓄積であるからである。

私の場合、既に日本では高田保馬博士をはじめ、戸田貞三、鈴木栄太郎の如き錚々たる先覚者がおられそれぞれ理論社会学や社会調査の権

威として斯界の発展に寄与すると共に後輩の育成に当たってきたのであるが、如何せん「社会学」として完全に市民権を有するに至らなかった。その最たる理由として挙げるならば、それはやはり日本における社会諸科学に対する認識が極めて浅く、とくにマルクス経済学の受けた弾圧状況を見れば判るように、社会学もいわば「日陰に咲く花」にも譬えうような境遇におかれたことが仇となっていて、社会学を学ぶ者もいわゆる「赤化」の温床と見做されるが如き状況におかれたのであるから、必ずしも故なきことではなかったのである。少くともこのような悲運？に遭遇した日本の社会学の今日の隆盛を振り返ってみると正に隔世の感がある。社会学が現在大いにもてはやされている？とすれば、それはそれで喜ぶべきであるが、敢えて言えば徒花に墮してうう恐れなきにしも非ずと思う。先ずは目先の関心にまどわされることなく、腰を据えて社会学の来し方を篤と見極める必要があるのではなからうか。

私自身昭和18年10月にはじめて「社会学」にお目にかかった。当時は闇雲に社会学に嘯り付いたとしか言いようがなかった。恩師新明正道先生が昭和17年に出版された『社会本質論』を求め、ともかく丹念に読み始めてみたものの殆んど理解できず、如何ともし難かった。「読書百遍意自ら通ず」というので、何とか読解を試みたためか多少臆気ながら解り始めた。しかしそれも束の間、社会学史を知らなければ斯学の

勉学は一步も進まないことに気付いた。しかし社会学のいわば先進国（英仏独）の社会学書のなかでも、いわゆる古典に類するものが驚く程多いのでこれらを読破するにはどうすればよいか迷って了ったのである。そこで独乙の社会学者の著書のなかで必読のものを選んでみたが、そこではじめて当時はドイツ社会学の枢要な学者のなかでG・ジンメルのものが最も適当だと思ひ読み始めたのが『社会分化論』だったのである。しかしこのような社会学入門期に突如昭和18年10月（1943）に文科系学生（旧制大学）と生徒（旧制専門学校）の徴兵猶予の特権が停止され、学業の継続は絶望視されるに至った。1年8ヶ月の間社会学から引離されていたのであるが、敗戦と同時に幸いにも9月に復学したものの、この貴重な空白期間を埋めるために、当然ファースト・ステップから新規巻き直しの生活を強いられた。

日本における社会学は、戦時中全く窒息状態におかれたのであるが、敗戦を契機にして戦勝国アメリカの社会学が入ってきた。とはいえ今日のように自由に文献を入手できる環境にはなかった。また復員学生が高価なアメリカの専門書を購入できる筈もなかった。しかし幸いなことに東北大学の図書館は辛うじて戦災に遭っても軽微な被害を蒙っただけで図書は戦前のものではあったが残存していた。ただ戦後の混乱から回復せず学生生活は決して楽ではなかったが、再び勉学に励むことができる喜びもあり、学問に対する情熱も持ち合わせるできるようになった。ただ復員学生をはじめ、陸海軍の学校（陸軍士官学校や海軍兵学校）在学中終戦を迎えた者を各大学で受け入れる制度ができたので、こうした学生や復員学生で大学は満員、教育設備も不足し、そこで繰上げ卒業的修業制度が出来たのを活用して？規程の修業年限未満でも卒業できることになった。私の場合は終戦前

2ヶ月復学後正味19ヶ月計21ヶ月で卒業したのである。本来ならば36ヶ月（旧制は大学修業年限3年）必要とするところ21ヶ月で卒業した。ということはまさに「月足らずの子供」と同じである。しかし卒論だけは何とか仕上げねばならなかったので、テーマをどうするかに迷った。しかし限られた文献をどのように利用し、自分の最大関心事の問題に接近しようかと考えあぐんだ末到達したのは、ジンメル研究かテンニェス研究のどちらかに決めなければならなかったのである。図書館の蔵書には恩師新明先生が図書館用として購入したドイツ社会学の図書が相当数あったなかで、最終的にはテンニェスを扱うことにして、彼の文献を渉獵した。言わずもがな、彼の名著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』を扱うのが最適と考えたのであったが、実は彼の著作のなかに『世論批判』（1922年刊）のあることを発見した。時恰も戦後日本が民主化への歩みを始めた時代、さすれば「デモクラシー」のいわば根幹をなす「世論」を扱うことが最適？と考えた。しかしこの本は何と646頁の大冊（現在出版刊行中のテンニェス全集 Tönnies Gesamtausgabe, Bd14, 2002, の頁数で646頁。現在まで4冊刊行されており、すべて完読するのは最終巻24冊の終了を待たねばならない。）である。併し勇を鼓してこの大冊に取り組んだ。題して「『輿論』に於けるテンニェスの学的体系—『輿論批判』を廻る—考察。」併し如何せんこの大著を読了することは到底私の能力の及ばざるところであった。そのため今、卒論を読み返してみると『世論（旧漢字では「輿」の字）批判』の大冊をテーマとして掲げたものの、私の能力の限界を遥かに越えるものであったので少しく禁欲して、先ずテンニェスの社会学説体系の概要から始め、この書物著述のテンニェスの意図、目的、そして本論で「輿論の概念—言語に表われた相互関連について—」

(彼はコトバについて大学入学当初言語学を主として聴講し興味をもったために、輿論の概念の刻明な言語学的説明を行っている)を記述しており、言語学的素養の並々ならぬ見識に驚いた。彼が入学した大学は、独佛戦争(1870-71)の後エルザス-ロートリンゲンが独領となって、1872年に創立されたシュトラースブルク大学であり、そこで言語学者F・M・ミュラー教授の教えを受けた。輿論という言葉(Die öffentliche Meinung)のMeinung(名詞)のmeinen(考える)という動詞の実に詳細な記述が『輿論批判』の冒頭にあり、何故「輿論」に言語学的執着ぶりを見せたのか解らなかったが、このように、彼が言語学から大学生活に入ったことで諒解できた。

世論の担い手は「公衆」であるという前提の下でテンニエスは、類似している面も少なくはないが「群衆」(「群集」と記する場合が多い)を先ず採り上げていると思われたし、また「群集」と世論の関係を一応抑えておく必要があると考え、ル・ボンあたりの群集やG・タルドなどを参考にしながら、世論の正当な担い手と目される「公衆」について、その発生と拡散傾向を論じた。ここで初めて世論の生成とその結実に至るまでの段階に達するのである。僅か400字詰原稿で40枚(現在所有している卒論は用紙も悪質、色褪せて黄色味を帯びて了った)でこの大著に挑んだのは、考えてみると無謀極まりない所業だったと、今にして思うが切羽詰った挙句の結果である。しかし、現在までもそうであるが、テンニエス研究が社会学研究者にとって必須であるとはいえ、それは『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』を中心に展開されており、『世論批判』に取り組んだ者は知る限り皆無であることを思えば、若気の至りとはいえ満足すべきだったのではなかったかと思う。

このようにして学部時代の不足分を多少でも

補なうことを心掛けたものの、依然として不足分は充足できない。当然といえば当然の話ではある。そこでこれを補うには如何にすればよいか思案にくれた。当時(昭和22年)は就職難でもあったが、しかし必要なところは求職者の確保に懸命であった。民間に就職するにしても余り自信なくやはりもう少し身につけるものをきちんと身につけなければいけないだろうと考え、大学院(旧制)に進学することにした。併し研究テーマをどうするかも確定しておかねばならないので、テンニエスと並んでドイツ社会学の泰斗G・ジンメルの研究に着手すべく準備した。結局、ジンメルの提唱した「形式社会学」構想が果して社会学の遺産としてどこまで有効なのか、あるいは「形式社会学」という社会学の立場が絶対的の正当性を持っているかどうか…に焦点を合わせてそれを研究課題としたのである。

今日まで発刊された各種「社会学辞典」や「社会学事典」の中のG・ジンメルの項目あるいは「形式社会学」の記述を調べてみると、確かにジンメルについてはほとんど異口同音に社会学を独立社会科学として市民権を与え、社会を形式と内容に分け、社会化の実質的二分化を中心として展開しているという記述が多い。確かにジンメルは社会の相互作用を重視し、それまで論争の焦点とされてきた「社会实在論」と「社会名目論」を相互作用説を展開することによって、いわば第三の立場をとり、なおかつ社会学が社会科学の主要分野として確立したことを鮮明にした。独立科学としての確固たる位置づけを明らかにしたことによって、形式社会学の追従者や亜流と見做される学者がその後輩出し、特にドイツでは瞠目するような盛況振りを現出した。L・v・ヴェーゼ、A・フィーアカントの他のM・ヴェーバーや高田保馬さらにはアメリカのシカゴ学派などに多大の影響を及ぼしたのである。従ってこうしたジンメルの及ぼした

影響の大きさを見る時、彼の社会学の重みを感じることができるが、彼が社会学のいわば独自性を強調しただけであれば、「形式社会学」の創始者としての確固たる名誉に後世の社会学研究者は首肯するであろう。しかし、私はジンメルという社会学者が、唯単に社会学を社会科学のなかの一独立科学として位置づける方法論を展開したことだけで彼を評価しない。むしろ彼が社会学に意を用いたその延長線上の彼方に彼の本質的狙いがあったことに留意しなければならないと思う。つまり彼は当初『社会分化論』を1890年に刊行し社会学研究の第1歩を踏み出したが、これも社会学の社会科学における位置付け、即ち独立科学たる所以を明確化するといったところまででそれ以上は踏み込んでいない。つまり「形式社会学」をもってはじめて「社会学」の市民権獲得のための有力な持論を展開したのである。がしかし、それでジンメルは満足していたわけではないであろう。この著書刊行に先立って、いわば非社会学的論文や評論を数多く発表していることをわれわれはどう見るべきか。この点に止目しなければならない。むしろジンメルがその後社会学研究から離脱したわけではない。しかもここで注目すべきは1908年に刊行された『社会学—社会化の形式に関する研究—』までの間にも、また多くの論文・評論が発表され、それらは彼の社会学を基盤とした発想を十分に駆使しながら書かれていることである。就中社会学について、僅か9頁（ジンメル全集5巻 Georg Simmel, Gesamtausgabe 5. Aufsätze und Abhandlungen, 1984~1900所収）に過ぎない論考では『社会学の問題』（Das Problem der Soziologie）があり、いわばこれが契機となって次々と本格的な社会学関係の著書が発表されたことに注目しておかなければならない。ジンメル社会学構想のいわば原点がここに秘められているのである。この論考の冒頭に

は次のような叙述がある。すなわち、「現代において歴史学と人間一般の理解とが為してきた最も重要で効果の多い進歩としては個人主義的な見解の克服を妥当としている。歴史像の前景に立った個々人の運命にとって代って、本来有効なこと決定的なこととして社会的諸力、集团的行動—こうした諸力と行動のなかからは完全に明確に個々人の関与は引き離されてしまう。すなわち人間についての学問は人間社会についての学問になったのである。（傍点筆者）精神諸科学のいかなる対象もこのような方向転換から遠ざかることはできない。つまり諸運動が個人的にいかにか昇りつめるところでも、例えば芸術的業績においてであれ、われわれは種の進化においてさまざまな原因を—この諸原因から一般的には美しいものを受容するに至ったのだが—時代の特異な社会状況においてこのような芸術的生産の動機を探し求めるのである。（中略）社会学はわれわれが期待するように本当に社会における諸経過の全体と個々の出来事のすべての変形を社会的な出来事とすべきものと考えれば、それは近代的に取り扱われた精神科学のすべてのために付けられた包括的名称以外の何物でもない。そして社会学は哲学の運命を作ったあの空虚な共通性と抽象性に余地を与えている。……社会の歴史とあらゆるその内容の歴史として、つまりあらゆる出来事の解明の意味で—この解明のためには、社会的諸力と配置を媒介としてではあるが、—社会学はきわめて数少ない学問である—例えば《帰納法》そのものであるかのように。」（ibid. S.52~53 G. Simmel Gesamtausgabe Bd. 5. 1992 傍点筆者）しかし社会学は心理学と競合する学問であるという認識がジンメルに重くのしかかっていた。これを排除するために心理学を一應承認しながらも、社会学の存立基盤とその理由を明確にしなければならず、そこで社会学が社会学たりうる理由

を明らかにしなければならなかった。この論文ではこの点について次のように述べている。「最も広い意味での社会は何人かの個人が相互作用に入るところ、そこに存在する。一緒になって散歩するための一時的な団体から、家族あるいは中世のギルドの密接な統一まで、きわめてさまざまな程度や種類の社会化を確認するに違いない。特別な理由や目的—それなくしては当然社会化は起りえないのだが—は社会過程の主要部分つまり素材 (Material) を形成する。このような原因の結果、このような目的の促進がそれらの担い手の下で相互作用・社会化を引き起すのであり、これこそが形式であって、その形式に内容を与え、そして科学的抽象化によって、特殊な社会科学の全存在が内容から分離するのである。というのは同じ形式—多種多様な素材の同種の社会化でもあるが—がきわめて多様性極まりない目標を支持することが明らかになるからである。社会化一般が宗教団体にも反乱者にも、経済団体にも芸術学校にも、国民会議にも家族にも唯一存在するわけではなく、形式的同一性を社会的結合の特殊な配置と発展に広げる。集団の諸目的とその道徳的性質に従って、考える最も多様な集団である社会諸集団で見出すものは、例えば上位と下位、競争、模倣、対立、分業といった同じ形式である。われわれが見出すものは、ヒエラルキーの形成 シンボルの中の集団形成原理の具体化 党派内分離自由のあらゆる段階あるいは集団に対する個人の結びつき、集団自体の交叉と層化、外部の影響に対する集団の一定の反動形式である。」(ibid. S. 54~55)

ジンメルはこの小論文でまさに社会学の基本的発想の原型を指摘したのであって、この意味では最も重視すべきであるが、これまで日本の社会学者はこの論文に注目することがなかったのである。ジンメルの著作活動(含論文・評論

等)は、本格的には1881年の「カントの物理的単子論への質料の本質」で開始されている。これはドクターの学位論文の請求論文であるがさ程長いものではない。しかし知られているように彼がカントから出発しながら、社会学をどうやら横目で見つつ、関心を深めていったのが1890年代に発表された評論等に散見される。その1つについて参考までに採りあげておく。これはR. ウォルムス (René Worms 1869~1926) によって創設され、現在に至るまで続いている「国際社会学協会」(l' Institut International de Sociologie) の機関紙に投稿したものである。一連の社会学者の協力でパリで1893年の初めてから出ている雑誌であるが、ここにはフランスの社会学者としてA. エスピナス (A. Espinas 1844~1922) G. タルド (G. Tarde) イギリスではJ. ラボック (John Lubbock 1834~1913 考古学・人類学者) E. B. タイラー (Edward Burnett Tylor, 1832~1917 人類学者) ドイツではA. E. F. シェフレ (Albert Eberhard Friedrich Schäffle, 1831~1903) らが執筆陣に入っている。このメンバーからも判るように、この雑誌は、「廣義の社会学の概念を雑誌の綱領として捉えているし、(これは社会によって作られるあらゆる現象の学としてであるが) また更には社会的状況の実際上の学問の継続が社会現象の理論的に歴史的加工と並んで論議されているので、ここに提出されたものはかなり企業の多様な姿と判然としない目標像である。」(G. Simmel, Gesamtausgabe, Bd., 1. S.306) と書いているところから、ジンメルが社会学の学問体系として曖昧な形で「社会学」を利用することへの疑問を投げかけていることに気付く。従ってこの論文の寄稿者に対する批判もまた鋭いものがある。例えば彼が論及している論文のなかで、フランスにおいて大商店に対して小売業が中間層として闘

争状態にあるという、いわば二極分解状況を協同社会的 (genossenschaftlich) 状況によって解決を図ろうとする考え方に賛意を表し、なおかつ立法的措置、特に保護関税政策と税法の改正によって、利益が益々大会社と資本家の手に集中し、小売業が完全に押し潰されて了い、プロレタリアが発生してくるというのである。これらはすべてフランスの直面した状況へのジンメルの考え方ではあるが、この国際社会学協会誌へのジンメルの論評は、いわば彼の高度な抽象的理論には見られない。きわめて現実味を帯びた社会問題への関心の高さを示している。

さらにもう一篇の論文に対するコメントを紹介しておくことにする。これはベルティロンの論文についてのものである。ここで採りあげられているのは、フランスにおける出生率低下をめぐる論文への論評である。1892年のフランスの出生率低下に対して24.8という数字(人口千人当り)は諸外国、例えばイタリアが36.3、ドイツが37.7、オーストリーが38.4(同一の諸指数との比較)に比べて何故低いかを検討している。その理由はフランスにおける少額所得者が優勢であるためと、特に多くの子供の教育並びに相続財産の少額であることを挙げている。ジンメルがこのようなフランス事情を協会誌で知る限り彼の関心は人口問題、社会問題へと拡散し、われわれがジンメルを通してかれの社会学にのみ関心を寄せることが果して正しいのかどうか、ということになる。このことは日本におけるジンメル研究の成果として従来展開されてきたかれの主著に、戦後になって注目されるに至った『貨幣の哲学』(Philosophie des Geldes 1901)があるが、少くとも戦前(1945年以前)において、この書物に対する社会学者の関心は皆無であった。しかし西欧の社会にみられた資本主義経済体制を分析するための手法として、ジンメルの胸中に去来した問題は、「貨幣」を

通して社会を徹底的に考究しようとしたことであり、この関心はかなり以前、具体的には1889年に発表された「貨幣の心理学」をもって嚆矢とする。(Zur Psychologie des Geldes, in Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft in Deutschen Reich, 13. 1889, S.1251~1264,) この論文で、「貨幣は絶対的な客体であって、その客体にすべての人格が終了する」という結論を提起したのであるが、これは要するに人間が資本主義経済の渦中に入って以降は、貨幣のもついわば魔術に翻弄される客体にすぎないことを意味している。逆に言えば近代化という資本主義経済を中心とした社会—西欧社会—の担うべき運命に委ねられた人間を描写したものと言ってよい。この点について廳茂は、次のように述べている。「ジンメルにおける社会圏の分化拡大論と分化文明人論の二つの近代論の系列の統合の試みは、1890年後半において「近代文化における貨幣」(1896)や「貨幣の生のテンポにとっての意義」(1897)によって徐々に本格的に模索されつつあったが『貨幣の哲学』において、それはほぼ原理的に完成する。(中略)ジンメルの思索における個人の現実的命運論をできるだけ簡明に、しかも的確に捉えるためには、この『貨幣の哲学』の中心的統合的位置への配慮が根本的な前提である。すなわちこの課題のためには、作品論的にいえば『貨幣の哲学』をそれ以前の関連論稿の収斂地点に設定し、この作品の解釈をその都度の論点に応じてそれ以降の著作によって部分的に補強するという手法が一番の近道なのである。」廳茂『ジンメルにおける人間の科学』(1995・165頁—166頁)

このような分析を必要とすることは必ずしも正鵠を得ていないとは言えないが、ジンメルの眞の意図がどこに設定されていたかを十分理解するには、ジンメルのおかれていた執筆状況を

顧みる必要があるのではないか。というのも、いわばジンメルは「形式社会学」樹立の発起人であったにもかかわらず、それがたとえL. v. ヴィーゼらによって踏襲されたとはいえ、少くともドイツにおいては現在ジンメル論は影をひそめた観を免れないのである。しかしこのような「ジンメル不要論」ともいうべき風潮については、最近「M. ヴェーバールネッサンス」が喧伝されたと同様に「ジンメル・ルネッサンス」が注目を浴びてきたことにわれわれは注目しなければならぬ。

ジンメルは『貨幣の哲学』執筆以前に小論あるいは短篇的に貨幣論を展開して、それらを最終的に集大成したものが『貨幣の哲学』という膨大な著作を生んだことに注目しなければならない。従って大著が出版されるまでにジンメルが発表した論文や論評的なものについて一応目を向けておかなければ、『貨幣の哲学』そのものの内容を完全に理解したことにならないのである。

他方『貨幣の哲学』が刊行されてからではなく、ジンメルが「貨幣の心理学」について1889年に「G. シュモラーのセミナー」で行った講演の内容が1901年の「立法・行政・国民経済年鑑」にシュモラーによる評論として掲載されている（Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft 25. S. 799）ほか、ガッセンとラントマンの1958年刊行の『G. ジンメルへの感謝の書』にも「貨幣の心理学」が採りあげられている（K. Gassen, M. Landmann, Buch des Dankes an Georg Simmel）。これらはほんの数例にすぎない。更に挙げればオーストリーの国民経済学者協会で1896年にジンメルが「現代文化における貨幣」というタイトルで講演を行ったもの（Das Geld in der modernen Kultur）1897年には「新ドイツ評論」（Die Neu Deutsche Rundschau）に「生のテ

ンポのための貨幣の意味」（Die Bedeutung des Geldes für das Tempo des Lebens）が掲載されている。このようにみえてくると、ジンメルが『貨幣の哲学』を完結するまでに、主題についてのいわば準備作業として、いかに磐石の態勢を整えたかを知ることができる。イギリスの社会学者T. ボットモアとD. フリスビー両者による『貨幣の哲学』の英訳書の序文には、用意周到なジンメルの『貨幣の哲学』刊行まで実に8年もの期間を必要としたと述べている。（The Philosophy of Money, Introduction to the Translation, 1978. P1~49）このようにして『貨幣の哲学』が生れたのであるが、ここでわれわれの最大の問題、つまり論点を何処に求めるべきかに想到しなければならない。端的に言えば『社会分化論』が1890年に刊行され、その副題が「社会学的及び心理学的研究」となって、社会学研究とは言っていないことは、ジンメルが社会学を支柱にしたのではなかったことは明白であり、『貨幣の哲学』がなぜ『貨幣の社会学』として明白に社会学的アプローチであったと敢えて闡明しなかったのか、そして1980年に至ってはじめて『社会学』の刊行を見ているといういわば遍歴のなかから、ジンメルの意図と方法とを探求しなければならない。

社会学を学ぶ者にとって、上述の一連の社会学書と目されている著述には、いわば迷いつつ時に哲学者として、時に社会学者として揺れ動いた足跡を見ることができるのである。知られているようにジンメルはカント研究から出発した（博士論文1881年）この年から『社会分化論』刊行までの9年間は例えば「ヨーデルンについての質問」（Fragebogen über das Jodeln, In Jahrbuch des Schweizer Alpenclub, アルプス地方の民謡に用いられる裏声による特殊な唱法）を発表しているが、これは僅か2頁のものであるが、音楽に対する関心は1882年に「音楽に

ついで「心理学的民族学的研究」(Psychologische und ethnologische Studien über Musik) を発表している。これは「民族心理学・言語学雑誌」に発表されたもので、本格的論文である。次いで「ダンテの心理学」(Dantes Psychologie 1884) また「方法論的観点からのペシミズムの根本問題」(Über die Grundfrage des Pessimismus in methodischer Hinsicht. 1887) など次々に発表し『社会分化論』に辿りつくのである。

このように見てくると、ジンメル『貨幣の哲学』は何故に「貨幣の社会学」でなかったのか多少判然としてくると思われる。つまり彼は貨幣の社会的・経済的意味付けというよりは、むしろ「文化」の一環として捉えた向きが濃厚である。ジンメル自身当時、すなわち1890年代は、ドイツにおいてのみならずフランス(特に C. ブーグレ Célestin Bouglé 1870~1940, デュルケム学派の一人であるが、社会経済史や社会主義の研究者として著名『平等思想—その社会学的考察』1899刊)でも注目され、『貨幣の哲学』出版直前にブーグレ宛の書簡で明白に社会学者としてよりも哲学者の立場である旨を伝えている。社会学者にとってこの書簡はジンメルの当時の状況を知る有力な手掛りになると思われるので紹介しておきたい。

「私が社会学者としてのみ認められ、実は私はやはり哲学者なので、哲学に私の人生の課題を置いています。社会学は元来私にとって副次的専門なのです。私が一冊の総括的な社会学書を出版することで義務を果たしたとしても、恐らく私は社会学に戻ることはないでしょう」(ブーグレ宛1899・12・13は未発表書翰)これがジンメルの本音の告白だとすれば、われわれ社会学者にとって驚き以外の何者でもない。しかしこうしたジンメルの本音の裏にはプロシヤの大学組織にあって、やはり「哲学」が重きをなし、

彼自身の大学教授資格取得のために哲学を主専攻にしたこと、そして他方では社会学が社会主義的学問分野と見做され勝ちであることなどに起因すると考えられる。(この点については J. キンツレ、P. シュナイダー編の『ゲオルク・ジンメルの貨幣の哲学』のハインツ・ユルゲンダーメ Heinz-Jürgen Dahme による「ジンメルの『貨幣の哲学』における社会学的要素」に詳しく紹介されている。J. Kintzele u. P. Schneider : Georg Simmels Philosophie des Geldes; H. J. Dahme: Soziologische Elemente in G. Simmels Philosophie des Geldes. S.47~87)

M・ヴェーバーに関しては、「ヴェーバー・ルネッサンス」などと注目を浴びているが、ジンメルについても劣らず最近注目を浴びるようになってきた。しかしこれは社会学といういわば単一科学からのアプローチではなく、ジンメルの全貌を把握するためには、当然哲学・社会学・心理学・経済学・芸術史・文化史などなど、途方もない広範に亘る専門分野の総括的あるいは包括的視野に立ったジンメル像への肉迫が要請されるし、またこうした接近の必要性を益、痛感するからに他ならない。

ジンメル・ルネッサンスの口火を切ったのは、おそらく F. H. テンブルック (F.H. Tenbruck) であろう。彼は『ケルン社会学・社会心理学誌』の1958年の時点で「ゲオルク・ジンメル」を書いている。(Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie. 10 Jahrg. Heft 4. 1958. S.609~612) ドイツの敗戦後は、社会学の再興に亡命先から帰独した社会学者の活躍には見るべきものがあつたとはいえ、日本のばあいと同様、圧倒的にアメリカ社会学の奔流の如き流入によって席卷されていたなかで、自国の誇るべき社会学者について、その真価を改めて俎上に挙げた一人として、この



テンブルックの論文は極めて意義深いものがある。この論文はジンメル再興を企図したものではないが、末尾で次のように述べているのに注目しておきたい。「独自の社会科学に対する(いわば)彼の最終弁論にもかかわらず、ジンメルは社会学者でもなければ哲学者でもない。彼はこの点で一人である。かくして彼は形式社会学を二面から哲学によって取囲むようにそのように一方法論でないにしても一社会学の問題を哲学の問題に直接移行させる。われわれはジンメルを新カント派に固定しようとした。しかしジンメルの社会学的関心事と哲学的関心事は歴史的にデルタイに由来するし、事実上個人・社会・文化の関係に由来する。」(ibid. S. 611) 従ってジンメルを社会学者としてのみ評価することについてはおのずから限度があることになるのである。社会学者の研究にとって彼を社会学者としてのみ評価することが、却ってジンメルをあるいは誤解することになる虞れなきにしも非ずとさえ言えるかも知れない。

この論考のサブタイトルは「ジンメル再読」となっている。どこまで、どのように再読の實を挙げることができたのか、甚だ心許ないのではあるが、多少でもジンメルに肉迫できれば…という思いの一端を示しえたにすぎない。しかも前半は私が社会学を専攻しようとした経緯についていささか冗長にすぎた嫌いが無いわけでもない程紙幅を浪費?したために、本論執筆がある程度制約されたことについては慙愧に堪えない。しかしジンメル再読の必要性は誰よりも私自身熟知しているので、機会があれば再び何処かで筆を執って発表する心算であり、従ってまた当然のことながらこれで終止符が打たれて了ったわけでもない。

## 参考文献

### 外国語

1. Eulenberg, Franz: Neuere Geschichtsphilosophie 1909.
2. Koigen, David: Soziologische Theorien: G. Simmel soziologische Rationalismus, 1910.
3. Lieber, Hans Joachim/Furth, Peter: Zur Dialektik der Simmelschen Konzeption einer formalen Soziologie, in: K. Gassen/M. Landman (Hrsg.) Buch des Dankes an G. Simmel. 1958.
4. Steinhoff, Maria: Die Form als soziologische Grundkategorie bei G. Simmel, in Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie IV Jg. 1924/25. S. 215-259.
5. Hayek, Rudolf: The Sociology of Georg Simmel: The Forms of Social Interaction; in An Introduction to the History of Sociology (Hrsg. H. E. Barns) 1956.
6. Gassen Kurt/Landmann, Michael (Hrsg.) Buch das Dankes on Georg Simmel 1958.
7. Tenbruck, Friedrich: Georg Simmel, in Kölner Festschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, 10Jg. 1958.
8. Horkheimer, Max: Philosophie und Soziologie; in Kölner Zeitschrift für Soziologie, 11/Jg. 1959.
9. Sibylle, Hübner-Funk: Georg Simmels Konzeption von Gesellschaft. 1982.
10. Horst Jürgen Helle: Soziologie und Erkenntnistheorie bei Georg Simmel. 1988.
11. Werner Jung: Georg Simmel zur Einführung. 1990.
12. Larry Ray (ed.): Formal Sociology-The Sociology of Georg Simmel, 1991.
13. Jeff Kintzlé u. Peter Schneider (Hg.)

Georg Simmels Philosophie des Geldes.  
1993.

「ジンメルへの新たな視座」2004

14. Felicitas Dörr-Backs. u. Ludwig Nieder  
(Hg.) Georg Simmel zwischen Moderne  
und Postmoderne. 1995.

15. Charless Camie (Ed.) Reclaiming the  
Sociological Classics. 1997.

邦文

『ジンメル著作集』翻訳 全12巻、白水社

阿閉吉男『ジンメル社会学の方法』1979

『ジンメルとウェーバー』1981

『ジンメルの視点』1982

『ジンメルの世界—空間・都市・文化—』1989

廳茂『ジンメルにおける人間の科学』1995

雑誌『文化と社会』第5号 特集

附記

なお「新明社会学研究会」発刊による『新明社会学研究』第7号(2002年)第8号(2003年)第9号(2004年)第10号(2005年)に筆者が「形式社会学の再検討—ジンメル社会学を廻って」を発表したが、これは筆者が昭和24年東北大学における大学院特別研究生の研究報告をそのまま印刷に付したものである。参考にして頂ければ望外の喜びであることを付言しておきたい。

(すずき ゆきとし、

東京外国語大学名誉教授・元本学科教授)